

「蘭学事始 200 年」と「信徒発見 150 年」に「転向論」を考える。

2015/2/18

中島義雄(郵政ユニオン長崎)

1、はじめに

今年江戸中期の蘭学者の杉田玄白が書いた「蘭学事始」が世に出た 1815(文化 12)年から、ちょうど 200 年目である。鎖国を続ける日本に開国を求めて外国船が来航し、徳川幕府にも幕末の気配が出始めるころだ。

徳川幕府を倒して尊王政権をつくった明治維新は、武家政権から王政復古とした思想＝国学の影響であるが、しかし、彼らの多くは攘夷論＝外国排斥であり、開国思想はなかった。そのとき、オランダや英仏米ロなどに背中を押された薩長土肥の西国雄藩が、先進的に学んだ外国の学問＝蘭学に開国論は依拠していた。

では、江戸末期に日本を開国へと引き寄せた「蘭学」は、いかにして日本に始まったのか。この歴史的経過が「蘭学事始」に書かれている。蘭学は江戸初期の西洋医学伝来に始まるが、しかしそれは同時にキリスト教との出会いでもあり、蘭学は長い間、おりからの鎖国政策とともに、幕府により国禁の学問とされてきた。その後、幕府は 1811 年、一度は国禁を解くが、攘夷論の高まりから、1839 年、一転して蘭学の弾圧に走る。いわゆる蛮社の獄であり、学者らが処刑されるなど、蘭学は苦難の道を歩む。

玄白は「事始め」で、蘭学と一体となるキリスト教について「天正、慶長のころから西洋の人が、わが国の西のはずれに船をよこすようになった。表向きは貿易であるが、その裏にはなにか欲することがあつてのことだ。そのために災いごとがおこったことにより、徳川の治世以来、嚴重に禁じられた。このことは、私の知らない邪教であるから論じないが・・・」と、キリスト教には触れていない。切支丹の過酷な弾圧の時代であるが、しかし蘭学とキリスト教は一体であったことが言外にうかがえる。

日本では、キリシタンを認めた織田信長の死後、豊臣秀吉と徳川家康、そして明治初期までは、禁教令を敷き、キリシタンには弾圧と棄教＝転向という悲しい歴史が続く。長崎・西坂の丘の処刑場には、500 名以上の人が殺されたと記録が残る。

今年の 3 月 17 日は長崎の「信徒発見 150 年」の節目の年でもある。江戸末期の 1865 年、幕府が国を開く。長崎にもキリスト教の教会(大浦天主堂)ができ、そのプチジャン神父に浦上の隠れキリシタンが、信教を告白する。これが世界を驚かせた奇跡の信徒発見である。彼らは 290 年間、この信仰と棄教＝転向に

どう向き合ったのかを、小説「沈黙」などを見ながら考えたい。

2、新しい時代の始まりの偶然。

歴史の記憶をたどる。

1543年は自然科学で世界史を変えた年である。ポーランド人のコペルニクスが「天球の回転」という本を出し、「天体運動では、地球が太陽の周りをまわっている」という地動説を唱える。この自然科学の発展で世界は大航海時代から産業革命期を経て、封建制度が倒され、資本主義が生まれる。以降の世界は、物事が革命的に変わることをコペルニクスの転換と呼び、この枕詞は 500 年間も変わっていない。

この 1543 年は、日本を劇的に変える。当時の倭寇（海賊）であり、平戸の城主・松浦鎮信の庇護を受けていた中国人の王直が、中国にいたポルトガル人 3 名を載せて、拠点の平戸島に帰る途中、嵐にあい種子島へ漂着した（「世界史の中の長崎」から）。これがいわゆる鉄砲伝来であるが、おりから日本は戦国時代。この銃をいち早く取り入れた織田信長が天下を統一する。もしこのとき嵐がなく、予定通り平戸・松浦藩に船が着いていたら・・・歴史はどう変わっただろうか？

そしてこの 1543 年の日本では、もう一つの歴史が始まっていた。あまり語られないが、のちの徳川幕府=267 年の絶対制を築いた祖=徳川家康が生まれている。この 3 つは歴史の偶然だが、まさに 1543 年は歴史転換の起点ともいえるべき年でもあったのだ。

3、江戸時代のキリシタン弾圧

これから 6 年のちの 1549 年、フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝え、歴史がもう一つ扉を開く。ときの権力者の織田信長はキリスト教の布教を認め、信者は九州から関西に広がり、全国で 30 万人に及ぶ。しかし、信長死去の跡を継いだ豊臣秀吉は、一転して禁教令をとり、京都で病院などを開いた宣教師や信者 26 人を逮捕し、全国への見せしめとして、長崎まで引き回しの刑で連行し、西坂の丘で公開処刑を強行する。これが現在の 26 聖人の像である。

そして、時代は徳川幕府に変わり、さらに強まる切支丹弾圧の中、海外追放を拒み、布教のために国内に潜伏していた外国人宣教師も次々に捕えられ、厳しい拷問のもとで棄教を迫られる。その中で、1633 年（島原の乱より 4 年前）、ポルトガル人宣教師で日本教区の最高責任者であったフィレイラは、天正少年使節の一人であった中浦ジュリアンなどの 4 名とともに逮捕され、長崎で穴づくりの刑の拷問を受ける。ジュリアンは棄教を拒み、逆さづりから 5 日後に「わ

れはローマに行った中浦ジュリアンなるぞ」の叫び声を残し絶命するが、フィレイラは苦しみに耐えきれずに棄教する。

この報にローマ教会は驚き、新たに宣教師を日本に送り込むが、彼らも次々に捕えられ、厳しい拷問に負け、ついには「踏み絵」を踏み、棄教をする。そして、最後に、日本には外国人の宣教師が全くいなくなり、さらには島原の乱での農民らの敗北で、キリシタンは壊滅したとされる。この間の経過は、遠藤周作の小説「沈黙」や、飯嶋和一の「出星前夜」などに詳しい。

4、遠藤周作が見た長崎の原点「踏み絵」

①、遠藤周作と長崎の町

そして時代は一気に 50 年前の現代の長崎に飛ぶ。

1966（昭和 41）年、一人の作家が長崎・南山手を歩く。自身もキリスト教信者の遠藤周作である。このときの遠藤はこれとなくあてがあつて長崎にきたわけでもなかった。彼は市内観光中に、大浦天主堂前の観光客の雑踏を避け、天主堂の脇道の石段を見つける。そこは観光客が通らず、静寂であり、苔むした赤レンガの両壁や、すり減った石段は、江戸末期のままの風情であった。

遠藤はその急な石段を上りつめ、その帰り道、偶然にも 16 番館という木造・洋館づくりの資料館へと迷い込み、その中で、展示されている「踏み絵板」と出会う。

遠藤はその踏み絵の木枠にある足の指の跡らしき汚れに目を奪われ、禁教令下の人たちや、外国人宣教師の苦しみに思いをはせる。これが遠藤と長崎との出会いを決定的とする。このときのことを遠藤は、「切支丹の里」というエッセー一本に詳しく書いている。この踏み絵発見以降、遠藤にとって長崎は、最も大切な町となった。

遠藤は踏み絵を踏んで生き残った人や、踏み絵を拒否し神に命を捧げた人が、どういう心情だったのかと、思いを巡らす。また強者と弱者との心を思いながら、その後、殉教の地・長崎を何度も訪ね、長崎を舞台とした、あの有名な小説「沈黙」書き上げる。テーマは棄教=転向と人の生き様であり、それを見つめる神の「沈黙」に、「なぜ」と問いかける遠藤自身の心の葛藤である。これは 400 年前の歴史を、現代の課題に引き戻し、現代の転向論として読者に鋭く問いかける。

作家・遠藤周作にとって、その原点が南山手の大浦天主堂脇の、だれも通らない急な 100 段あまりの石段にあることは、彼が書いた「切支丹の里」の最初のページに、この石段の写真が載っていることからわかる。私的な思いだが、私は郵便配達で 40 年間もこの天主堂付近の洋館を配達してきた。まさに職場である。その馴染で観光にきた遠来の友人たちに、よくここの石段を案内する。体力に自信のない人には迷惑な話だが、ただ、この石段を上りあがった山の上から眺める長崎の港は素晴らしいからだ。

②、信徒発見

1587年の秀吉の禁教令から、290年余の苦しい時代を経て、明治維新の4年前の1864年に、長崎に新しい西洋の風が吹く。開国の新条約で長崎が開港し、西洋人が南山手に居留地を作り、教会を作る。これが現在、国宝の大浦天主堂である。当時としては大変豪華な聖堂に、長崎の町民は相次いで見物に押し寄せる。その中に浦上の隠れキリシタンの農民がいた。その一人が大浦天主堂のプチジャン神父に、自らがキリスト教の信者であることを告白する。世界は日本における300年の暗黒の時代ながら、信教を守り続けた隠れキリシタンの存在に驚き、その信者を称えて「信徒発見」の奇跡と絶賛する。

しかし、このときはまだ江戸幕府も、さらには明治維新後の新政府も、依然としてキリスト教を認めておらず、国は浦上の信者の農民たちを弾圧する、浦上4番崩れだ。信者は村ぐるみで全国各地へ流刑させられ、浦上の村は無人と化した。そこで流刑された人の多くは、厳しい拷問の末に亡くなっている。この弾圧の実態を知った西欧各国は、日本政府は開国条約に違反しているとして強く抗議し、ついに明治4年、明治政府は切支丹禁止の高札を撤去する。

5、「蘭学事始」と長崎

1815年、江戸中期の蘭学者の杉田玄白が「蘭学事始」を書いた。この本は、日本にどうして蘭学が始まったのかを記録した書物である。

その本の最初の項に、「漢学や儒学などは国が奨めたが、蘭学はそうではなかったのに隆盛になったのは、やはり医学による」としている。なかでも、1600年の慶長のころ、長崎に入港する南蛮船の通詞（通訳）をしていた西吉兵衛が医術を学び、西流外科を興し、ついには幕府の医師となる。これが「オランダ流の医事が御用となった始まり」とであると述べている。

ではこの通詞の西吉兵衛はいったい誰に蘭学を習ったのか。これが歴史の皮肉であるが、あのキリスト教の宣教師として来日し、長崎奉行所に捕縛され、拷問の末、棄教したフェレイラであるという。彼はしかし棄教＝転向で無罪放免となったわけではなく、長崎奉行所の厳しい監視の下に置かれていた。彼の役目は、その後、次々に捕えられてくる信者に、棄教を説得することであった。これは小説「沈黙」の中でも、フィレイラや同じく転向した宣教師のロドリゴも同様であるが、これが彼らを一番苦しめる。

フェレイラは日本名を沢野忠庵と変えさせられて、そののち禅宗に改宗し、その後20年余を長崎で過ごしている。彼は転びバテレンとして町民の嘲笑を浴びながらも、奉行所の手先として生き残らざるを得なかった。その生きざまを思うと、どれほど苦しかっただろうかと思いがいく。

ともあれ、フェレイラ＝沢野忠庵は、同じく長崎の儒学者・向井元升に蘭学

を伝授し、またこの仲介をする通詞の西吉兵衛の3人で、「乾坤弁説」という自然科学の本を書いている。これが江戸時代初期の蘭学の始まりの書物となる。ちなみに、向井元升は長崎に初めて大学（中島聖堂）を作った人で、芭蕉の高弟である俳諧師の向井去来の父である。

江戸初期から細々とつながった蘭学が、結局、徳川幕府を倒した。こうし点から線へと歴史がつながれば、その蘭学の緒が、禁教令下で弾圧され、棄教=転向したフェレイラにあるのだから、歴史的なかたき討ちが260年後に行われたことにもなる。（ちなみに、雑誌「世界」3月号で、寺島実朗が「蘭学と杉田玄白」で、フェレイラの果たした役割について「人の役に立っている」と書いている）。

6、幕末と蘭学

さらに、この長崎の西吉兵衛一族は通詞として、また医学者として、それ以降も代々続く。そして第11代目の西記志十が、幕末と明治維新のときに再度、歴史の先駆者として登場する。

1853年のペルー来航より10年も前の1843（天保14）年に、西記志十通詞兼蘭学医は、佐賀・鍋島藩（35万石）の支藩である武雄藩（2万石）に家臣として迎えられる。この領主である鍋島茂義は、まさに進取・鍋島藩の象徴的人物であり、西を迎え入れるほどの先を読む眼をもちえた藩主であった。鍋島茂義は西の進言で数百冊の蘭学書を買求めた。その中に、アヘン戦争の勝利を決めた圧倒的な破壊力を持つ大砲「ボンベカノン砲」や「アームストロング砲」の試射実験を書いた原書が入っており、西がこれを訳し、鍋島藩は江戸幕府に5年も先駆けて、鉄製大砲や移動携帯式小銃などを完成させる。（これら原書や大砲は、現在も武雄市の歴史資料館に多数が展示してある）。

この西洋の技術が鍋島藩をして、ペルー来航以降の外国船の日本来航に抗し、品川台場に鉄製大砲50門を備え、長崎港入口の神の島にも大砲15門を備え、外国の武力威圧に備えた。そしてさらに、明治維新を決めたいくつかの戦争も、この大砲や銃をいち早く取り入れ、西洋式軍隊へと組織替えをした官軍の勝利へと導いていく。まさに明治維新は蘭学のおかげだった。これは江戸初期の3人の蘭学者のせいだけではないが、蘭学なしには、江戸末期の日本の歴史はどうなったのかと思う。

7、総評解散と連合化。

そして、これらを踏まえ、現代の転向論を、1989年の労働界の再編時に重ねてみる。26年前の労働界再編（総評解体=連合化と全労連、全労協の結成=3鼎立）のときの総評労働者の労組選択である。

①、選択の基本

1989年11月22日の総評解体=連合結成は、戦後労働運動の協調派ナショナルセンターへの統一であった。このとき私たちに問われていたのはなんだったのか。

いうまでもなく、総評は1950年に産別から右派（協調派）に分離したナショナルセンターである。しかし、おりからの朝鮮戦争を背景に、日本人に戦争の危機を実感させ（福岡には空襲警報が出た）、一転して、その路線が反戦・平和、反合理化へと変わる。当時、これをさして、「ニワトリからアヒルへ」の変身=なんでもケッコウのニワトリが、なんでもガーガー文句をいうアヒルへの変身と揶揄された所以である。

しかしその総評も、25年後の1975年のスト権ストの敗北を頂点に、運動と組織面での主導権を失っていく。その象徴が総評の大黒柱であった国労解体の攻撃だった。そのときの連合派は国鉄改革賛成で、国労の10万人ページを闘わなかった。当然、国労は孤立の中で反連合、全労協をめぐす。その旗は総評路線の継承・発展にあった。

この総評解体=連合化の選択は、反マル生、反合理化で闘い、生きてきた総評活動家としての運動論を否定するものであった。当然ながら左派活動家にとって反連合は自然の思いであったし、私たちもそれに従い、90年5月に全通を卒業し、郵政全労協の旗揚げをめざす。

①、全労協労組結成

しかし、実態的には、反連合・全労協=独立労組結成の闘いは困難を極めていた。また並行して闘われていた国鉄闘争も、改革と民営・分割反対で、1047名の解雇撤回闘争の厳しい状況下で苦しい闘いとなっていた。私たちは国労防衛、総評路線の継承・発展をいう当時の総評三顧問の岩井章さんらの提唱は正しいと考えた。しかし、全通の多数派は、「国労の二の舞は踏まない」として、連合参加をあっさりと決める。そして協調派の証として、郵政反マル生闘争を闘った解雇者62名を守る4・28反処分闘争まで切り捨て、郵政とのさらなる労使正常化へとまい進した。ここに権利の全通は姿を消した。これは組織的変身の典型である。

89年秋から90年3月まで、当時の全通長崎中央支部（300名）は、3度の臨時支部大会を開き、その都度、連合反対を決議した。しかし、上部機関や連合派は、「全通は全国大会で連合加盟を決めたのだから、支部大会の反連合の決議は無効だ」として対立が激化する。そして1990年5月27日に、私たちは全通を離れた40名で、郵政長崎労働組合（郵崎労）を結成した。

しかし、連合発足後、反連合の風はなぜか急にやむ。いわく、「反連合は組織戦（全労協・独立労組）ではなく、連合に留まりながら反連合の運動をする路線である」との論法に変わる。反連合はそれが出来るまでの反対運動で、決まればそれに従うということであった。結果、郵政内部では全労協を選択した労組は極めて少なく、8労組で組合員数187人の郵政全労協が立ち上がっただけ

であった。

②、四面楚歌の郵政全労協

当時、私は郵政全労協の議長として、反連合の郵政全労協をつぶされないうために、ハリネズミのように身を固くして、自分の正統性を主張し、連合批判を強めた。なかでも国鉄闘争と総評路線を継承しない連合に安住する組織選択は左派としては間違いであると断じ、現代の「転向」ではないかと、月刊誌「伝送便」に書いた。

さすがにこれには、周囲から強い反発が起きた。「郵政全労協は団結破壊分子だ」とかの団結論や、「郵政全労協は左翼少数労組の小児病路線である」との非難であった。またある機関誌に5段抜きの記事で、名指しで「永久追放宣言」まで出された。また地域でも、全通はいうに及ばず、地区労などの幹部からも「組織破壊分子」として、「絶対に許さない」と通告もされた。まさに郵政全労協は「裏切り者」として四面楚歌状態だった。

8、転向論と人生。

①、組織選択と転向論

全通の連合化を転向として私が批判したことは、まさに連合内で反連合を闘う人々の逆鱗に触れ、反発も強かった。その過程で私は、転向批判もさることながら、労組を脱退することは、理由の如何を問わず許されないことなのだを知り、あらためて「団結論」が、逆に日本の左派少数労組を否定する現実を実体験した。

当時、抵抗路線の総評から、協調型の連合に移るという行為が、なんの抵抗なく素通りできる人たちに、左派としての矜持を求めたのだが、この分岐に彼らには「転向」とかの意識はなかつたかと、冷静になったいまは思える。事実、私たちに「全通に残れ」と語った人たちは、異口同音に「一時の辛抱」としたことからも、偽装的な組織再編（なだれ込み）と考えていたのだから。

活動家にとって思想と運動は一体であると思うが、それは私のように労働組合主義者の言うことである。労組の具体的な運動はそのときの情勢によりいくつも変わりうる。政治的グループの人々にとっては、労組選択は二の次であり、思想的に政治性が守られれば、それは許されることなのだ。こうして労働界再編（連合発足）のときの全労協への労組選択は、多くの人々には共感も得られず、組織戦が終わる。

②、沈黙に学ぶ

遠藤周作は、踏み絵と棄教を拒否し、殉教＝死を選択した強者も、そして拷問に苦しみ、ついには踏み絵を踏み、棄教した弱者も、結果的に、どちらも悩

み苦しんだという。遠藤自身も「沈黙」の背景を書いた「切支丹の里」で、もし彼自身が踏み絵をせまられれば、自分は踏むだろうとも書く。死よりも生が大事なのだ。

いま思えば、1989年の秋、私たち40人の郵崎労は連合加盟の踏み絵を踏まなかった。周りからは「あんたは強い人」（私自身にはそのつもりは全くなく、逆に弱気な性格だと感じているが）とよく言われ、多くの人は「私は弱いから」として、少数派独立労組には与しなかった。再編以前、反連合をと語り合った多くの仲間も、抵抗型から協調型の組織へ加盟した。そのときの彼らにとっては矛盾や悩みもあったと思うが、最終的な決断のときは、なにが正しいかという筋論よりも、「まず生きる」ことが優先する、まさに生き残るための次善の策だったのだろう。

③、連続する攻撃と反対派の崩壊

だが、こうして、連合加入という踏み絵を踏んだ人たちも、その後も苦しい日が続く。転向は厳しい現実の苦難から逃れるための「宗旨替え」であるが、しかし、今日の苦しみからの回避も、明日の安楽を保障しない。社会的な転向の証である踏み絵は、実は一度では決してなく、それどころか、毎日それを踏み続けることが求められ、自身がこれを断ち切る以外に、これから逃れることはできないからだ。

その証拠に、その後の連合・全通の中で左派活動家たちは、次々に人事異動という名のもとにパージにあう。連合・全通は「人事異動は団結論の侵害ではない」として、これを認める。これでは個人は抵抗できない。以来、26年で見ると、「連合の中で反連合を闘う」とした人たちも、現場で次第に団結軸を失いながら、組織的には地区労すら脱退させられ、連合へと純化する。

禁教令下に神を捨て、踏み絵を踏む宣教師や信者に、神は救いの手を出すことなく沈黙する。神は現世利益の体現者ではなく、ただ神を信じる人の胸のうちのみ存在するのだ。しかし労働組合は宗教とは異なり、現世の利益集団である。実利を解決しなければ存在価値もない。

労働界再編時に偽装転向で連合に入った大半の人も、職場でさらなる攻撃を受けて、苦しんでいる。禁教令下での転びバテレンが、自らの踏み絵だけでは許されず、ほかの信者に棄教を進める仕事を命令されたことと同じように、職場の左派活動家は、連合=協調派の証として、今度は自分が組合の役員と二足のわらじとしての郵政の役職の階段を上るように迫られる。これを拒めば、職場からも組織内部からも、「ニセモノ」として排除されるし、結果的に、どちらに回っても、二重の意味で、周りからの信頼を失う。この苦しみは、左派の思いを持ち続ける限り、辛いものだろう。

9、現在の立場と明日。

①、過去の選択と現在の選択

そして現代の闘いの分岐と選択である。

現代の危機の根=最大の矛盾は富の偏在である。新自由主義のもとでの非正規社会で働く人の貧困と格差の苦しみを実感し、その復権をめざすことだ。いまこの危機の中に、労組の闘いの分岐の状況が再び訪れている。争点は、労組と労働者が非正規の立場に立つのか、正社員の立場に立つのかの選択である。

多くの企業で過半数を超える非正規の労働者は、無権利、雇止めの厳しい労働条件下にある。このとき、既存の正社員の労組が、正社員化の立場に立つか否かだが、多くは、会社の利益を優先し、効率化に賛成し、事業防衛論に立つ。このとき、私たちはどうすべきなのか。

昨年、労働法改悪で連合が実に 6 年ぶりという国会前の座り込みをしたことは、労働者は闘う以外には生きてはいけないということを示している。この闘いで壁を突破できなければ、次の闘いはストライキなのである。ストは一度打てば、意識的には協調派から抵抗型へと転じることができる大事な切り札である。現状はまだ即ストまでは至っていないが、本当に労働者を守るためには、いずれそこへ向かうしかない。

26 年前の反連合・全労協独立労組結成以降、いろいろあったが、なによりも 40 名でスタートした長崎中郵の労組(旧郵崎労)が、いまなお、現在は郵政ユニオン長崎中郵支部として、30 名の仲間が結集していること。また全労協として生きぬいている。全体でいうと長崎中郵支部には、これまでのべ 107 名の仲間が参加した。しかし定年退職などを経て現在は 35 名である。昨年暮れに 2 名の仲間も新たに加わってくれた。このような組織的結果の自信が、この旧郵崎労=現・郵政ユニオンを安定させている。

過程だが、2008 年に長崎地区労にも加盟して、地域における「組織破壊分子批判」の壁を一つ越えた。また 2012 年には全労連の郵産労と全国的な組織統一をなし、全労協と全労連の労組の統一として非常に珍しい二重加盟組織となったし、去年の 11 月には、地域の長崎の郵政ユニオンは長崎県労連にも加入した。これで 1989 年の労働界の 3 鼎立構造を、全国でもまた地域でも郵政ユニオンは乗り越えた。

②、ストライキは日本の労働運動を変えるカギ

また春闘でのストも 2007 年の民営化以降、連続して闘っている。昨年のストでは長崎中郵支部でも非正規の仲間が 3 名入って、日本の労組の最大の壁=本工主義労組を少し揺らした。

労働者が自分たちの労働条件に不満を持ち、改善を要求してストを打つことは合法である。しかし、これは正社員の場合である。非正規・期間雇用社員では全く別である。

そこで郵政ユニオンは 2014 年の春闘では、非正規・期間雇用社員の組合員が

ストにはいったのだ。郵政の期間雇用社員はほぼ半年契約である。この期間中の仕事上のミス、またわずかでも非違行為などがあれば、会社は契約を打ち切る。雇止めである。こうした不安定な立場にある期間雇用契約社員がストを打つことなど、おおよそこれまでの郵政労働運動では珍しいことであった。

昨年の郵政ユニオンのストはこの常識を打ち破った。私は長中支部などでストに入った非正規の仲間から敬意を表す。普通に働いていても、少数派の労組にいるだけで「危ない」と言われる時代だ。そのことを知りながら、まさにわが身をかけて闘いに立つ。この勇気は、いまの日本労働運動に一番必要な、そして大切にされなければならない貴重な財産だ。

彼らはいふ。「正社員の組合員が非正規の人のためにストを打ってくれているとき、その当該である私たちも闘うのは当然だ」と。不安の中、意識を飛躍させた少数の人が、この壁を乗り越えるとき、闘いの質が変わり、必ず全国へこれは波及し、歴史が変わるのだ。2014年春闘の郵政ユニオンの非正規均等処遇要求のストは、この意味で画期的だったと思う。

と同時に私は、26年前の連合への再編のとき、全通を失業し、全労協の独立労組を作ったことを「良かった」と思える瞬間だった。私が若い頃、労働運動で出会った素晴らしい先輩の指導者たちは、連合再編のとき、そのほとんどが、協調派の連合についた。しかし、そのときでも彼らが言っていた「労働運動の火種は残すべきだ」という言葉をいま思い出す。先輩たちはその意味を「左派が生き残ることだ」とも言っていた。

無論、私もそう思うが、労組の「火種」は左派組織の維持とともに、「ストライキ」を闘うことだと思う。生き残った左派が、現在にどういう運動を闘うかが大事であり、若者世代にそれをどう引き継ぐのかである。

日本の労働運動の現実で、連合批判も必要だが、自分たち自身が春闘でどう闘うのかを示すことが、もっと大事だと思う。郵政ユニオンの春闘ストは連続して闘うことで、それを目指していると思うし、先輩の言葉を受け継いでいるのだ。

③. 資本と闘うものは、ともにあるべきだ。

郵政ユニオンは2000人の少数派労組ではあるが、いろんな意味で、日々毎日が新たな挑戦であり、さまざまに闘うことで、左派少数派労組の歴史を塗りかえていると思う。

わかりきったことであるが、左派がそれぞれの過去の対立の歴史を引きずるのではなく、分裂と対立を続ける愚をいまこそ清算しなければ、労働者の多数や勝利は望めない。そのためには、資本と協調ではなく、これと闘おうとする仲間たちは、実際に組織を統一し、ともに闘うことがぜひ必要だ。なぜなら日本の労働運動の敗北が、組織対立の結果にもあることもまた明らかだからだ。現在の日本の労働運動の再生には、闘う人の統一＝これ以外の道はないと思う。飛躍的とは言い難いが、抵抗型の少数派労組が結成26年を経て、組織を維持していることは重要だ。郵政ユニオンは全労協と全労連の中で、労契法20条裁判

などでがんばっている。

10、最後に

①、踏み絵を踏んでも生き残る。

最初に書いたように、今年は長崎の信徒発見150周年の記念すべき年である。大浦天主堂が建った1865（明治維新の4年前とキリスト教解禁から8年前）年の3月17日。浦上の隠れキリシタンの信者が、プチジャン神父に信教を告白する。世界史に希な、死刑を厳命する日本のキリスト教の禁教令下で、290年間も信仰を守り続けた人たちの存在は、キリスト教の強さを証明した。

しかしである。長崎の町民や浦上の農民らは、毎年、正月元旦にマリア像を踏む「絵踏み」という行為を強制されていた。いわゆる宗門改め（現在の戸籍登録）で、村人たちがそれぞれ、どこのお寺に所属するかの証を、絵踏みで示すことが必要であった。正月の元旦に家族そろって、絵踏みを行った隠れキリシタンたちは帰宅後、神に許しを求めたという。信徒発見150年に長崎教区の高見大司教は、彼らの機関紙の正月号にそう書いている。

だが、宗教で絵踏みをして、棄教や転向でもないとなれば、信仰は成立しないはずだが、隠れキリシタンはそれを受け入れ、生き残った。なぜならば、現世では絵踏みを拒否したら殺されることを、彼らはわかっていたし、だれも死を強制できないからだ。「生きる」。それが信教はもちろん、人間の原点だからだ。

だからいま、26年前の労働界再編時をふりかえり、いまあらためて思う。人は生きてこそその人生なのである。人は神を信じ、信仰を守るために絵踏みを行った。そして現世で生きることを選択したが、神はそれにも「沈黙」した。

確かに転びバテレンのフィレイラや、浦上の隠れキリシタンの信徒は、神を信じ殉教した天正使節団の中浦ジュリアンのように生きられなかった。渦中にあるものはその渦の全体は見えない。労働界再編という大きな波の中で、流れ全体を見極めることは難しかった。

しかしいま、はっきり言えることは、絵踏みを続けた浦上の隠れキリシタンは、現在、世界のキリスト教会の中でも、「信仰を守った奇跡」として高い評価を受けている。また転びバテレンと、長崎の町民に侮蔑されたフィレイラも、彼が後世に伝えた知力=蘭学の力で260年先に、江戸幕府を倒した。これから見ても踏み絵と転向論は、10年や30年の短い歴史観では語れない課題なのだとも思う。ところが当時の私の転向論は、これを考慮しない近視眼的な価値観であったと感じる。

②、天動説から地動説へ。

なぜそうなったのか。それは500年前の世界を支配していた天動説と同じような考えに私たちがあるからだと思う。日本の左翼の世界では、これまで主義・主張の原理解釈で絶対正統性を主張して、その理論と運動論でしのぎを削ってきた。そもそも社会運動はその理論の正統性のためにはあるのではない。常にそ

の社会で苦しむ、最下層の弱者の利益のために、全ての闘いがあるのだ。しかし、当時の諸組織は、自らの正当性を最優先に、言いかえれば、わが組織のために運動があるという、いわば天動説的な立場に終始し、弱者解放のために運動や組織があるという、地動説認識にかけてきた。

現代は、非正規労働者が過半数となり、そのための闘いは当然であるが、これまでの天動説的なありようは反省すべきであると思う。これは私のことであるが、本工主義の全通で運動を学び、これを卒業したとしても、郵政ユニオンも本工=正社員のための組織と運動であった。

そして、10数年前に闘った郵政の分限免職裁判で、非常勤職員を残業協定締結権（職場の過半数）にカウントしない協定は無効だという人事院と裁判所の判決から、彼らも職場の仲間の一人なのだという意識に転換し、さらに非正規の雇止め裁判でも解雇無効を最高裁で勝利し、非正規のための組織と運動へと郵政ユニオンは少し前進した。天動説から地動説への転換中である。

③、ともに闘い、統一へ。

現在、日本労働運動が極めて危機的な情勢下であり、この下でどう生き、どう闘うかを、もう一度論議し、方向を選択すべき分岐点だと思う。そのなかで、連合であろうが、全労協であろうが、全労連であろうが、まず生きる。そして、今をどう闘うかを、ともに追求することが、何よりも大事なのだと考える。現実的な対立面だけで、違いを批判し合うだけでなく、わずかながらも一致点を見出し、統一し、共にストを闘い、新自由主義の貧困と格差、非正規雇用を打ち破り、彼らの復権を目指して闘いたい。